

## 20世紀のディオゲネス アン・リネエル

262

アンリ・バルビュスが死んで了ひ、ロマン・ロオランはロンヤのスパイとして自分の処に住みこんだ一婦人と結婚して、二十年來一身を捧げて内助してゐた実妹と不和になつたので、その晩年の悲惨を危ぶまれてゐる。フランスの文芸思想界に於て今日を占領してゐる人は、先づアンドレ・ジイドやポオル・マルグリト等の自由共産主義者であらう。

併しこの人達にも増して、狭い範圍に於てではあるが、深い感化力を持つてゐる老思想家が一人ある。完成された而も徹底的な個人主義者であり、今様「桶仙人」とあだ名されるアン・リネエルがそれである。この人が私共の間になつて来たのは、七八年以來、絶対的平和論を唱へ、徴兵××〔拒否〕——××〔忌避〕といふよりは、もつと××〔積極〕的——運動の精神的中心人物となつての活動が知られてからである。

現代のディオゲネスは桶の中には生活してゐないが、巴里の裏町の薄暗い洞窟——朽ちてはた梯子

降車場つか登つた階上の室ではあるが正に洞窟と言つた方がよろしい——に静かに閑かに、而も不撓の闘ひを生活してゐる。詩人であり哲学者であり不屈の闘士でもある老思想家アン・リネエルは、一八六一年十二月七日北阿アルヂェリイのヌムウル（オラン県）に生れ、本年〔昭和〕は七十五歳だ。両親はカタロニヤ人である。彼の本名はアンリ・ネエルといふ。

両親のことから調べて見ると面白い。彼の父親は機械業の家に生れ、二十歳の時まで無学文盲であつた。機械では飯が食へなくなつたので靴屋の職業の稽古を始めた。適々父——アンの祖父——が死んで、四百フランを遺して置いたので、その金額で村の郵便集配人の地位を買つた。それから人の助力で手習ひをしたり、配達すべき手紙の区分をして貰つたりして、その間に独学をして、六ヶ月の後には、自ら夜学を開いて人に教へる程になつた。勿論それは自分の勉強のためであつたらう。昼間配達しながら学んだことを、夜学校で教へるのであつた。かうしてアンが生れた時には、もう立派に郵便局長になつてゐた。

彼の母親は町医の娘であつた。母親の父はルイ・フィリップの政府の下にあらゆる共和主義やボナパルチストの秘密結社に関係した。その姉妹のアントナン・カムドラスは、一八五一年のクウ・デタに際してはヴァールに於る共和党蜂起の首領であつた。その良人カムドラスは海軍々医であつた。

アンが生れて一ヶ月の後、父はモンリュソンに転任させられ、次でタルブに、最後にロテヤック（マルセイユの附近）に來た。アンは十六歳にしてラテン語の勉強を始めたが、その当時は僧侶になる積りであつた。然るに十八世紀の諸書を読み、また恋愛をするに至つて、彼の心は全然カトリック教

から離れ、人生といふものに向つてハートと理性とを開くことになつた。それから、エークス・オン・プロヴァンスのコレエヂ・ブウルボンで、修辭学及び哲学を学び、官費生として卒業した。それからは諸学校の教授として一九二二年まで継続した。

著作は何十種か数へきれないほどある。詩と小説とが多い。詩も小説も主として諷刺的であり、また哲学的である。従つて一般世間的には余り有名ではないが、非常に深い感化力を持つてゐる。彼の独立独行的生活には多くの奇行と戦ひとが自然に伴つて来た。

彼は機械文明の嫌忌者であり、暴力の徹底的否定者、従つて戦争反対、××「政府」反対論者であり、且宗教反対論者である。

彼は宗教反対者であるが、併し彼の論拠はマルキストのそれとは全然正反対の点にある。「私の精神は私の精神から外へは出ない。外部はその中へは入つて来ない。私は主観的宇宙・私自身の他は決して知らない」と宣言する彼は、唯物論のマルキストと対蹠的に立つてゐること明白である。

彼は耶蘇に就いて書いてゐる。「イエスは社会的一切の結縁から離れて、自由に放浪して生活した。彼は僧侶の、外的儀式の、そして大体に於て、一切の組織の敵であつた。僧侶達の追及を受け、裁判官から放棄せられて、兵隊のために十字架にかけられて死んだ。彼はソクラテスと共に最も有名な宗教の犠牲者であり、最も顕著な個人主義の殉道者である。僧侶等は、彼の身体とともに彼の教理をも十字架にかけた。彼等は生命の水を毒水と変造した。」(Georges Vidal "Han Ryner." 2引用)

彼は万應の同情を以て耶蘇に就いて、殊に最後の苦惱に就いて書いてから最後に言つてゐる。「それから軟かい微風が彼を撫で、静かな光がギリシヤの島々の方から到達した。優しい私語が耳元にささやいた。」「お前はお前自身を知つてゐるか」「あゝ！併し、その言葉はイエスが能く知らない國語で話された。且つ彼の苦惱はそれを聞くことを妨げた。さうしてその苦惱は彼を眠りから遠ざけ、憧憬から遠ざけ、更にまた彼自身からも、唯一の救ひの言葉からも遠ざけた。」("Songs Perdus". p. 79)

現代の思想家又は予言者の人物として、彼に最も近く比較せらるべき人は蓋しガンヂであらう。暴力否定に基く「良心の反抗」運動(オブジェクション・ド・コンジャンス)——兵役××「拒否」——の中心人物たる彼と、非妥協運動の指導者たるガンヂとは、その不撓不屈の態度と、機械文明否定の思想とに於て、極めて酷似してゐる。そして両者は、ともにトルストイやカーペンターと多くの共通点を持つてゐると言へる。

アン・リネエルは言ふ。「物質的進歩は、或る者に人為的要求を増加し、他の者に労働を増加することを目的とするものであることを賢者は看破する。物質的進歩は、人類を益々泥濘と苦痛の中に深入りさせるところの、増進的重量に他ならない……。機械の発明は労作を苛烈ならしめた。それは労働をより多く苦痛にし、より少く調和的にした。それは自由な叡智の発意に代へるに奴隸的恐怖的精神を以てした。それは曾て快適な道具の主人公であつた労働者を戦慄する機械奴隸たらしめた。」("Le Petit Manuel Individualiste". p. 18-19)

ガンヂも同じ様なことを云つてゐる。「経済的進歩は眞の進歩に反する」「この文明は道徳に顧慮せず宗教に頓著せず、この文明は破壊であつて、人は只病者にされるのみだ。」「吾々が若しこんな事——機械の發明等——に心を向けるならば、奴隷となつて道徳力を喪失するにきまつてゐる。それ故に吾々の祖先は深く考へて、手足で出来ること許りをするに定めた」「工場に於ける火の使用は、労働者の身体を傷め、天命を害ふ故に、外国品及び複雑な機械の製品はアヒサム(不殺生の教)の信者には禁物である。」

社会哲学に就てもガンヂとアン・リネエルとは頗る近似した考へを持つてゐる。ガンヂの考へでは、社会はその存在を始めた時から以来、暴力がその生活基礎をなしてゐる。或る民族に対する他民族の暴力、少数者の多数者に対する暴力、個人に対する社会の経済的暴力(過去の総ての革命がその実例である)等これである。「力学的威力としての無暴力とは意識的忍苦を意味する。それは決して悪をなすものゝ意に、自ら卑下して服従せねばならぬといふことではない。いな寧ろ、吾々の全我を以て暴威に抵抗せねばならぬといふことである。」(『青年印度』)

アン・リネエルも同じやうな考へを持つてゐる。この悪社会は、殆ど絶望的に見えるまで久しいこの方勝利してゐる。あらゆる改革は胡麻化しに過ぎない。少しも変化してゐない。「ストイック主義者が奴隸制を半自覚によつて厭悪すべきものたらしめた時、その半自覚心を満足させるために農奴制が發明された。今日は、半自覚者達は農奴制の廃止を誇り、またそれで幸福なのである。そして俵給者達は、その無邪氣な舌で自ら自由だと称する。……問題は何時でも同じだ。外観を変へるだけ

「今日の国家は、如何に人民が立派な馬鹿かといふことを知つてゐる。そしてその尽きざる愚劣さを利用することに於て最も果敢に、最も確實にその老獪さを發揮する。殊に国家を代表する裁判官といふ者は、その醜態を曝露して余すところがない。その時代、その国の法律に従ふ裁判官は、その時代が去り、その欺瞞の形式が亡びると、人間中の最も悲惨なもの、最も大罪なものに見える。近い例を引いて見よう。ナポレオン三世時代の末期には『共和制万歳!』を叫んだ者を投獄した人間(裁判官)が、帝政没落の後数ヶ月に於て、『皇帝万歳!』を叫んだものを極めて冷静に投獄した。あゝ何といふ悲惨な皮肉だらう!」(『Le Père Diogène', p. 127)

ガンヂとアン・リネエルとは、その思想に於て以上の如く類似点を持つてゐるが、たゞ宗教に關し、政府に対する意見に於て、両者は互に異なつてゐる。即ちアン・リネエルが宗教と政府との全的否定者であるに對して、ガンヂは宗教の信者であり、又民主的政府の信者である。

アン・リネエルは絶対的暴力否定論者である。彼はフランスの一無政府主義新聞『種まく人』のエリゼ・ルクリュ号に於て「ルクリュと暴力問題」といふ一文を掲げて論じてゐる。ルクリュが「現在まで、いかなる革命も完全に自発的のものなくそのためにいかなる革命も完全に勝利を博さなかつた。それ等のあらゆる大運動は、例外なしに多少とも何人かに指導されたものである。そのためにこれらの大運動は、その指導者達の為に成功したのみであつた」と言つてゐるのを引いて、アン・リネ

エルは言ふ。「完全に自発的である革命、エリゼ・ルククリュの眼にも私の眼にも、真に価値ある革命は果してなほ暴力を必要とするであらうか？ 彼（ルククリュを指す）はその必要を信ずる。そして私はそれを信じない。こゝに吾々の別れる一の原因がある。」

アン・リネエルの暴力否定は、トルストイの無抵抗主義に似てゐて、ガンヂの「無暴力の抵抗」とは些か気持を異にしてゐるかに見える。即ちガンヂが「怯懦と暴力と何れか択ばねばならぬ場合に、私は暴力を勧める」と言明してゐる点は、アン・リネエルのルククリュ批評の趣意と気分を異にする。それはアン・リネエルの瞑想的文学的なのに対して、ガンヂの実際的政治的である相違から、由来するものであらう。

或るトルストイヤンが、エリゼ・ルククリュに、虎が飢えて仏陀を食はうとした時、仏陀はそのなすが儘に委したといふ物語を聞かせた。するとルククリュは「その寓話は解る、併し仏教徒達は、ある日若し虎が一人の子供に飛びかゝつてこれを食ひ裂くのを仏陀が見たとして、それをもなすがまゝに放任したといふことは語らない。私としては、そんな場合、仏陀は虎を殺したに違ひないと信ずる」と答へた。ところがアン・リネエルは言ふ。「社会生活上または国家生活上に於ける虎といふのは、制度上の職権であつて人ではない。手を以て把握し得ないファントムである。暴力で防がうとしても防げないし、罪はその職権にあつて、その人には罪はない。その人は暴力によらず、教育方法で改められる、また精神的に改めねばならぬ」と。

然しながら、自然現象としての社会進歩が成る過程に到達して突變的飛躍を行ふ場合には、個人の

意識によつて其方向を換へることは困難である。吾々のなすべきことは其以前に於て、その洪水を引き入れ流下せしむべき水路を用意するにある。併しながら、如何に用意周到に準備するとも、人智人力には限りがある。久しく積積せる宇宙無限の諸勢力が澎湃として注ぎ来る時には、さうした準備をも突破されるかも知れない。また仮令それが予期の如く準備の水路に流下するとしても、その激變に際して人心は興奮せざるを得ない。かうした場合に對する防衛的組織を用意することは、却て興奮する人間の暴力を防止する上に効果がありはしないか。

個人主義は彼に於て、主観主義と離るべからざる思想である。何事よりも先きに重要なことは、即ち「汝自身を知れ」といふことである。各人が各自の中に宝物を内蔵してゐる。各人が自らの内に世界の説明を保有する。「私が外界に就て何にも知らないといふことが、私の知つてゐる總てである。……私は決して主観的宇宙即ち私自身の外は知らない。」人間が万事万物の尺度である。「人間は些かの欺瞞と破壊とを伴はずには決して分解せられない一組織である。行動の根が押し延されてゐる土壌の中には、知識と信念とが存在する。そして信念と知識とは活動的原理、慾望或は傾向が必要である。思索の自在な光明下に於てでなければ動作は調和的の正確さを現はさない。科学への不断の且つ良好な努力には一定の生活規律が前提される。」(“The Subjectivisme”, p. 21-22)

けれども人間は外来の影響を防禦し又は脱却することが出来るものである。「その全影響は、それに服し、それを体験する者にとつて悪である。私が外来の運命に倚りかゝらうとするや否や、私は私自身の運命の上にこの運命を重加することになる。」かうしてアン・リネエルは絶対的個人主義に到

達する。「如何なるドグマ、如何なる伝統、如何なる外的意思にも依存しないところの道德原理は個人的良心の外には呼びかけない。」(『Le Petit Manuel Individualiste』, p. 3)

彼は「神」の思想を排撃すると同じ強烈さを以て「義務」の考へを排撃する。「義務、お前は神の幻象から出た影の如きもの、その尤もらしい紳名ではないか？ カントは、お前の背後に『神』を見出さうとの素心で、お前を合成的命令法と呼んだ。何れにしてもお前は一主人の名称である。が私は主人を欲求しない。服従することは常に醜悪であり、卑怯である。束縛の道德を退ける、総ての属従主義を退ける……」(『Le Subjectivisme』, p. 48)

アン・リネエルの一つの逸話に就て書きたいが、既に余白がなくなつた。この桶仙人の著作も、詩、コント、評論等幾十種あるか数へきれないほどであるが、今こゝに列記する余地がない。総てまたの機会に譲る。

## 亡国民の偉業

### ▲ 亡国民と勝国民

猶太人が世界の到处に金権を掌握して居ることは遍く人の知る處で、亡国民中の最も異彩を放てるものと言ふことが出来やう。先般印度詩人がノobel賞を授けられたと言ふので世界中の評判になつたこともあるが、北米印度人中には又学者や偉人が少くない。戦勝国民には絶えざる恐怖と悲哀とが纏綿するものであるが、亡国民の悲痛、困難の後には又偉業が起り、誇りに満されるの例が頗る多いのである。私が茲に紹介したいと思ふのは、凶暴なる露独政府の亡ぼす処となつた波蘭の一婦人の事業である。